

大学生活と経済状況との関連についての研究（第2報）
順位相関分析，因子分析，重回帰分析の結果をもとにして

A Study on the Relation between University
Life and Economic Situation (2nd Report)
Based on the results of rank correlation analysis,
factor analysis, and multiple regression analysis.

飯 田 昭 人
IIDA Akihito

北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要
第13号 2022

大学生活と経済状況との関連についての研究（第2報） 順位相関分析，因子分析，重回帰分析の結果をもとにして

A Study on the Relation between University
Life and Economic Situation (2nd Report)
Based on the results of rank correlation analysis,
factor analysis, and multiple regression analysis.

飯 田 昭 人
IIDA Akihito

要 旨

本研究は、2019年に発表した、『大学生活と経済状況との関連についての研究』の第2報である。

この第2報では、次の4点を分析した。①順位相関分析による、講義のある日の普段の過ごし方（10項目）と他変数（「相談相手とよく話す」「自尊感情」「レジリエンス」「経済困窮度」との関連、②順位相関分析による、奨学金収入、奨学金返済への不安、自分の暮らしぶり、経済的困窮度の関連、③吉中（2016）の将来展望11項目（「生活に困っても働けば何とかかなと思っている」、「失業したり、困ったりするのは、本人が悪い」他9項目）の因子分析（最尤法・プロマックス回転）、④経済的困窮度を従属変数とし、「自分の暮らしぶり」、「自尊感情」、「レジリエンス」、「話し相手」、「自分の暮らしぶり*自尊感情」、「自分の暮らしぶり*レジリエンス」、「自分の暮らしぶり*話し相手」を独立変数とした、強制投入法による重回帰分析。

①からは、「自尊感情の高い学生ほど、友達や恋人と過ごす時間が長い（ $r = .145, p < .05$ ）」。「レジリエンスの高い学生ほど、アルバイトをする時間が長い（ $r = .164, p < .01$ ）」。「レジリエンスの高い学生ほど、授業の予習や復習、課題などをする時間が長い（ $r = .123, p < .05$ ）」。「レジリエンスの高い学生ほど、大学の授業以外の自主的な勉強をする時間が長い傾向がある（ $r = .101, p < .10$ ）」。「経済的に困っている学生ほど、テレビやDVDの視聴時間が短い（ $r = -.169, p < .01$ ）」。「経済的に困っている学生ほど、大学の授業以外の自主的な勉強をする時間が長い傾向がある（ $r = .116, p < .10$ ）」。「経済的に困っている学生ほど、授業の予習や復習、課題などをする時間が長い傾向がある（ $r = .101, p < .10$ ）」などが明らかとなった。

②からは、「奨学金を多く借りている学生は、奨学金返済への不安は高い ($r = .124, p < .05$)」「奨学金を多く借りている学生は、自分の暮らし向きが悪いと捉えている ($r = -.354, p < .01$)」。「奨学金を多く借りている学生は、経済的困り感が高い ($r = .217, p < .01$)」ということが明らかとなった。

③からは、大学生の考える将来展望には2因子が抽出され、第1因子は「労働に関する価値観」、第2因子は「家庭に関する価値観」となった。

④からは、大学生が「自分の暮らし向き悪い」と捉えていること、レジリエンスの乏しさも経済的困り感につながっていることが示された。また、「自分の暮らし向きとレジリエンス」および「自分の暮らし向きと話し相手の数」に交互作用が認められた。これらも経済的困り感に影響を与えていることが示唆された。

はじめに

本調査研究の第1報(飯田, 2019)として、大学生においては、生活困窮そのものが自尊感情やレジリエンスの低下に影響を及ぼすというよりも、生活が困窮しているという自身の「認知」が自尊感情やレジリエンスの低下と関連を示していることを明らかにしてきた。つまり、子どもや青年期の貧困問題を考えるにあたり、実際の経済的困窮に対する支援ももちろん重要であるものの、「自分(の家庭)は経済的に困窮しているのだ」という認知が自尊感情やレジリエンスに影響を及ぼすことから、そういう認知を過度に感じさせないような周囲のあり方こそ重要といえよう。

加藤(2019)も、自身が携わった子どもの生活実態調査の結果として、「現時点で親や学校はさまざまな努力や取り組みを通して、貧困世帯の子どもが生活の苦しさを感じなくても済むように防御する役割を果たしている可能性」と指摘しているのは、貧困の認知に焦点を当てているといえる。

だが、大学生の貧困や経済状況と心理的影

響に関する研究は驚くほど少ない。経済的要因による悩みが一定数あるはずなのに、学生相談の書籍などを渉猟しても、ほとんど見つけることができない。

2021年2月28日に、加藤弘通(北海道大学)、吉住隆弘(当時中部大学、現在中京大学)、私の3名で『心理学の視点から生活を支えることを考える』という講座を開催した(飯田・加藤・吉住, 2021)。

その中で吉住隆弘は、子どもの貧困に関する研究および実践から「なかなか困り感が見えないケースもあるということです。もちろん困っているというふうに来る方も、大人に限らず子どもに限らずいるわけなのですが、中には困り感がなかなか分からないようなケースというものがあります」と述べ、実際に経済的困り感を抱えながらも、そういった困り感を表出できない学生は少なくないものと思われる。

また、加藤弘通は「貧困が何か問題を引き起こすというよりも、何か問題が起きたときにその解決を難しくするということに、貧困の問題の焦点を当てなければいけない点が

あるのではないかと指摘し、経済的困り感を抱えた学生は、そうではない学生よりも、何かしらの問題が生じた際の解決を困難にする可能性があるということは重要な視点であると考える。

ちなみに、私たちの研究では、新型コロナウイルス発生前後を比較すると、大学生の経済的困り感群が2.7倍増加していることから(飯田・水野・入江ら, 2021)、学生の経済的状況が及ぼす種々の影響は計り知れない可能性があるだろう。

このような背景をふまえて、本研究では、①順位相関分析による、講義のある日の普段の過ごし方(10項目)と他変数(「相談相手とよく話す」「自尊感情」「レジリエンス」「経済困窮度」)との関連、②順位相関分析による、奨学金収入、奨学金返済への不安、自分の暮らしぶり、経済的困窮度の関連、③吉中(2016)

の将来展望11項目(「生活に困っても働けば何とかかなると思っている」,「失業したり,困ったりするのは,本人が悪い」他9項目)の因子分析(最尤法・プロマックス回転)、④経済的困窮度を従属変数とした,「自分の暮らしぶり」,「自尊感情」,「レジリエンス」,「話し相手」,「自分の暮らしぶり*自尊感情」,「自分の暮らしぶり*レジリエンス」,「自分の暮らしぶり*話し相手」を独立変数とした,強制投入法による重回帰分析を実施し,大学生活と経済状況との関連について明らかにしていくこととする。

方法

1. 調査協力者

北海道内の2大学の学生274名を分析対象とした。対象者の性別,年齢,学年,居住形態の内訳はFigure 1, 2, 3, 4のとおりである。

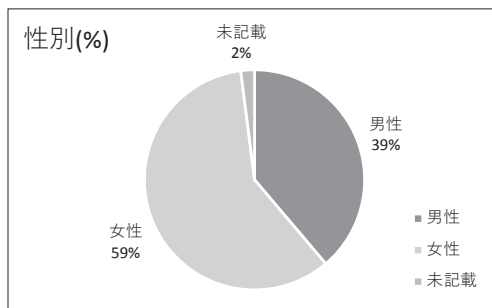


Figure 1 性別

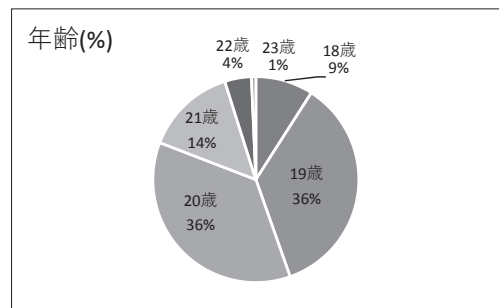


Figure 2 年齢

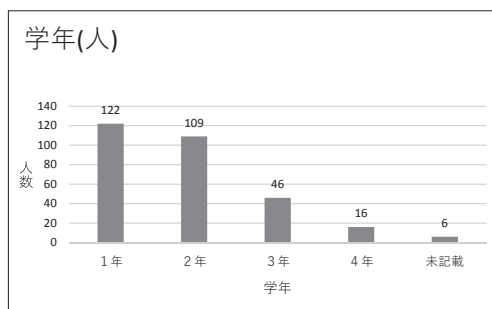


Figure 3 学年

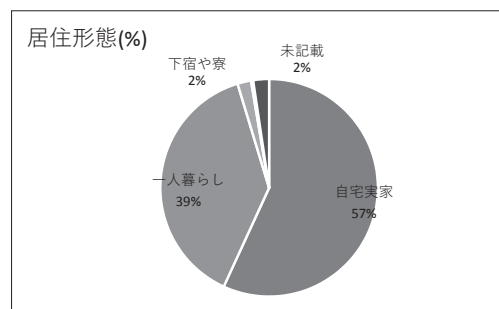


Figure 4 居住形態

2. 手続き・調査内容

1) 手続き

2018年1月中、講義中に質問紙調査を配布、実施した。研究の趣旨を説明し、同意の得られた学生を対象とした。なお、本研究の実施にあたり、北翔大学の研究倫理委員会の承認を得た。

2) 調査内容

(1) 大学生生活の状況

吉中(2016)を参考に、1ヶ月の収入状況(「保護者からの仕送り」「アルバイト」「奨学金」「その他の収入」の4項目を「0円」から「13万円以上」までの7件法)。アルバイトの経験(「現在している」「今はしていないが、大学生になってしたことはある」「したことはあるが、大学生になってしたことがない」「したことがない」の4項目)やアルバイト報酬の使いみち(①生活費(食費・光熱費・住居費など)、②授業料および大学に関するもの(教科書や参考書、部活の遠征費など)、③携帯電話料金、④交際費(友達や恋人などと遊ぶお金など)、⑤娯楽費(自分の好きなものを買う)、⑥貯金、⑦その他)、奨学金の利用(「大学生になって初めて借りている」「高校生のときも借りており、大学生になっても借りている」「高校生のときは借りていたが、大学生になって借りていない」「今まで借りていない」の4項目)や利用の決心(「自分で決めた」「親から奨学金を借りるように言われた」「高校の先生から進学の手段として借りることをすすめられた」「その他」の4項目)、奨学金の利用にあたり相談した人(「親や家族」「高校の先生や高校の関係者」「友人や先輩」「大学の先生や職員」

「誰にも相談しなかった」「その他」の6項目)、奨学金の残金(「実家に送っている、または実家で使っている」「急な出来事のために残している」「就活のために残している」「なんとなく残している」「娯楽・遊興費(遊びなど)に使う」「親が管理しているので、親に任せている」「その他」の7項目)、奨学金の返済予定(「自分で全額返済予定」「自分と親・家族で分割して返済予定」「親・家族が全額返済予定」「何も考えていない、わからない」「その他」の5項目)、奨学金返済の不安(「全く不安ではない」から「とても不安である」までの5件法)について尋ねた。

(2) 対象者自身に関すること

- (1) 対象者自身の捉える自分の暮らしぶり(「大変苦しい」から「大変ゆとりがある」までの5件法)、経済的困り感(「とても困っている」から「全然困っていない」までの5件法)について尋ねた。
- (2) 吉中(2016)を参考に、①「困っているときの相談相手(親、きょうだい、祖父母、大学の先生、大学の友達、地元の友達、ネット上の友達、その他の大人、その他)と相談頻度(「全然話さない」から「よく話す」までの4件法)、②「将来展望(「生活に困っても働けば何とかなると思っている」、「失業したり、困ったりするのは、本人が悪い」、「自分はワーキングプア(貧困状態で働く)にならないと思う」、「将来の年金はとてもあてにしている」、「自分ひとりの生活で精一杯で結婚する余裕はないと思う」、「結婚することに希望を持っている」、「子どもを生み育てることは難しいと思う」、「卒業後の仕事は、正規労働(常勤職)と

して働くつもりである」「卒業後は、非正規（アルバイトなど）で構わないので、やりたい仕事を優先したい」「卒業後は、すぐに仕事に就かなくてもよいと思っている」「進路や就職に不安を感じている」の11項目を「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの5件法）、③「講義のある普段の過ごし方（「大学の授業等への出席」「授業の予習や復習、課題などをする時間」「大学の授業以外の自主的な勉強」「友達・恋人づきあい」「サークルや部活動」「アルバイト」「社会活動（ボランティアやNPO活動など）」「読書」「テレビやDVDの視聴」「インターネット・スマホ・SNS」の10項目を「0時間」から「21時間以上」の8件法）について、それぞれ尋ねた。

- (3) Rosenberg (1965) の次の項目（「少なくとも人並みには、価値のある人間である」「いろいろな良い素質をもっている」「何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う」「だいたいにおいて、自分に満足している」「物事を人並みには、うまくやれる」の5項目を「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの5件法）を採用した自尊心尺度短縮版。
- (4) 平野 (2010) の二次元レジリエンス要因尺度の次の項目（「どんなことでも、たいして何とかなりそうな気がする」「人と誤解が生じたときには積極的に話をしようとする」「つらいことでも我慢できるほうだ」「自分の性格についてよく理解している」「自分から人と親しくなるのが得意だ」「人の気持ちや微妙な表情の変化を読み取るのが上手だ」「自分は粘り強い人間だと思う」

の7項目を「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの5件法）を採用したレジリエンス尺度短縮版。

結果と考察

1. 相関分析の結果から

- 1) 講義のある日の普段の過ごし方(10項目)と他変数（「相談相手とよく話す」「自尊心」「レジリエンス」「経済困窮度」）との関連

普段の過ごし方(10項目)と他変数(相談相手とよく話す, 自尊心, レジリエンス, 経済困窮度)に関するスピアマンの順位相関係数を求めたのがTable.1である。

この結果から次の9点について言えると考えられる。①自尊心の高い学生ほど、友達や恋人と過ごす時間が長い ($r=.145, p<.05$)。②レジリエンスの高い学生ほど、アルバイトをする時間が長い ($r=.164, p<.01$)。③レジリエンスの高い学生ほど、授業の予習や復習、課題などをする時間が長い ($r=.123, p<.05$)。④レジリエンスの高い学生ほど、大学の授業以外の自主的な勉強をする時間が長い傾向がある ($r=.101, p<.10$)。⑤経済的に困っている学生ほど、テレビやDVDの視聴時間が短い ($r=-.169, p<.01$)。⑥経済的に困っている学生ほど、大学の授業以外の自主的な勉強をする時間が長い傾向がある ($r=.116, p<.10$)。⑦経済的に困っている学生ほど、授業の予習や復習、課題などをする時間が長い傾向がある ($r=.101, p<.10$)。⑧経済的に困っている学生ほど、自尊心が低い ($r=-.210, p<.01$)。⑨経済的に困っている学生ほど、レジリエンスが低い ($r=.$

-140, $p < .05$).

①については、自分を大切に思っていることが、友達や恋人つきあいを促進させていることにつながると思われる。②については、粘り強さや精神的回復力のある学生が、アルバイトを長時間行うことができることが示唆される。③については、粘り強さや精神的回復力のある学生が、授業や課題への取り組みに対して時間をかけて行うことが示唆される。④については、粘り強さや精神的回復力のある学生が、大学の勉強に留まらない、自主的に勉強をする傾向が示唆される。⑤については、経済的に困っている学生は、おそらくアルバイトなどで忙しくて、テレビやDVDなどを視聴する時間がないものと思われる。⑥および⑦については、経済的に困っている学生は実は、アルバイトなどで忙しい反面、大学の勉強をおろそかにしてはいけないと思って、勉強に時間をかけている傾向が示唆されるのではないかと。⑧については、経済的な困り感を抱えているということは、自分自身の価値がないと思ってしまうのではな

いだろうか。⑨についても、経済的に困り感を抱えているということは、自分自身の中にある、レジリエンス（精神的回復力など）も発揮しづらいのではないだろうか。

2) 奨学金収入, 奨学金返済への不安, 自分の暮らしぶり, 経済的困窮度の関連

奨学金収入, 奨学金返済への不安, 自分の暮らしぶり, 経済的困窮度に関するスピアマンの順位相関係数を求めたのがTable. 2である。

この結果から次の3点について言えると考えられる。①奨学金を多く借りている学生は、奨学金返済への不安は高い ($r = .124, p < .05$), ②奨学金を多く借りている学生は、自分の暮らし向きが悪いと捉えている ($r = -.354, p < .01$)。③奨学金を多く借りている学生は、経済的困り感が高い ($r = .217, p < .01$)。

現在は、給付型奨学金の運用も始められているが、本調査を行った2018年は貸与型の奨学金についてであった。

Table 1 普段の過ごし方と他変数に関するスピアマンの順位相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1. 相談相手	1.000													
2. 自尊感情	.161**	1.000												
3. レジリエンス	.171**	.523**	1.000											
4. 経済的困窮度	-.048	-.210**	-.140*	1.000										
5. 大学の授業等への出席	.012	.028	.027	-.045	1.000									
6. 授業の子習や復習、課題などをする時間	.027	.045	.123*	.100*	.359**	1.000								
7. 大学の授業以外の自主的な勉強	-.030	-.034	.101*	.116*	.091	.419**	1.000							
8. 友達・恋人つきあい	.058	.145*	.067	-.076	.205**	.082	.011	1.000						
9. サークルや部活動	.096	.047	.097	-.026	.076	.020	-.001	.169**	1.000					
10. アルバイト	.056	.052	.164**	.073	.169**	.090	-.001	.194**	.025	1.000				
11. 社会活動(ボランティアやNPO活動など)	.036	.072	.021	.059	.017	.140*	.227**	.036	.081	-.013	1.000			
12. 読書	-.015	.012	.003	.036	-.018	.204**	.370**	.052	.012	-.085	.174**	1.000		
13. テレビやDVDの視聴	-.033	.043	-.048	-.169**	.262**	.142*	.055	.318**	.015	.004	-.010	.135*	1.000	
14. インターネット・スマホ・SNS	-.048	-.017	-.063	.002	.264**	.071	-.038	.454**	-.029	.171**	-.126*	.011	.417**	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

吉中 (2016) は、奨学金問題の背景について次のように指摘している。学費負担者の収入が減少しつつあるなかで、奨学金を借りて進学せざるを得ない状況になっていることがある。調査結果より、奨学金制度の情報は高校の教員から得て、申し込み時には親に相談していること、在学中の受け取りは、3分の1の学生が親の手元で受け取っていること、奨学金は少しでも残そうとしていること、などがみえてきた。また、少数ではあるが家計補助的に給付している実態もうかびあがった (吉中, 2016)。

貸与型奨学金を多く借りている学生について、返済不安や暮らし向きの悪さ、経済的困り感が示唆されるので、大学教職員による手厚い支援体制が求められると思われる。

2. 因子分析の結果から

吉中 (2016) の将来展望11項目 (「生活に困っても働けば何とかなると思っている」、「失業したり、困ったりするのは、本人が悪い」、「自分はワーキングプア (貧困状態で働く) にならないと思う」、「将来の年金はとてとてもあてにしている」、「自分ひとりの生活で精一杯で結婚する余裕はないと思う」、「結婚することに希望を持っている」、「子どもを生み育てることは難しいと思う」、「卒業後の仕事は、正規

労働 (常勤職) として働くつもりである」、「卒業後は、非正規 (アルバイトなど) で構わないので、やりたい仕事を優先したい」、「卒業後は、すぐに仕事に就かなくてもよいと思っている」、「進路や就職に不安を感じている」) について、最尤法・プロマックス回転による因子分析を実施した。因子分析の結果と各因子におけるクロンバックの α 係数、負荷量および因子間相関は Table 3 のとおりである。

第1因子は「生活に困っても働けば何とかなると思っている」、「失業したり、困ったりするのは、本人が悪い」、「自分はワーキングプア (貧困状態で働く) にならないと思う」、「将来の年金はとてとてもあてにしている」など、労働や年金などについて挙げられていた。このことから第1因子を「労働に関する価値観」と命名した。

第2因子は、「自分ひとりの生活で精一杯で結婚する余裕はないと思う」、「結婚することに希望を持っている」、「子どもを生み育てることは難しいと思う」の3項目で、結婚や子育てについて挙げられていた。このことから、第2因子を「家庭に関する価値観」と命名した。

大学生の将来展望として、労働と、結婚や子育てなどの家庭のことを主に捉えていることがうかがわれた。ただ、「卒業後の仕事は、

Table 2 奨学金収入, 奨学金返済への不安, 自分の暮らしぶり, 経済的困窮度に関するスピアマンの順位相関係数

	1	2	3	4
1. 奨学金収入	1.000			
2. 奨学金返済への不安	.124*	1.000		
3. 自分の暮らしぶり	-.354**	-.127	1.000	
4. 経済的困窮度	.217**	.227**	-.583**	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

正規労働（常勤職）として働くつもりである」
「卒業後は、非正規（アルバイトなど）で構
わないので、やりたい仕事を優先したい」「卒
業後は、すぐに仕事に就かなくてもよいと思っ
ている」「進路や就職に不安を感じている」
の3項目は除外されたことから、第1因子の
「労働に関する価値観」は、比較的楽観的な
ものであるとともに、「失業したり、困った
りするのは、本人が悪い」といった自己責任
論で捉えていることが示唆された。第2因子
の「家庭に関する価値観」についても、「自
分ひとりの生活で精一杯で結婚する余裕はな
いと思う」「子どもを生み育てることは難し
いと思う」の2項目の因子負荷量はマイナス
であることから、結婚や子育てに希望を持っ
ていることがうかがわれた。

都築（2007）は、大学生の将来展望や職業
展望の明瞭さは、職業アイデンティティや進
路選択の実際の状況といった要因と関連をも
つと指摘しているが（都築，2007），経済的
困り感を抱えている学生は、職業アイデンティ
ティや進路選択にはより敏感になっているこ
とが推察される。

3. 重回帰分析の結果から

経済的困窮度を従属変数とし、「自分の暮
らしぶり」, 「自尊感情」, 「レジリエンス」, 「話
し相手」, 「自分の暮らしぶり * 自尊感情」,
「自分の暮らしぶり * レジリエンス」, 「自分
の暮らしぶり * 話し相手」を独立変数として、
強制投入法による重回帰分析を行った
（Table 4）。ちなみに、「自分の暮らしぶり
* レジリエンス」, 「自分の暮らしぶり * 話し
相手」には交互作用が認められた（それぞれ、
Figure 5, Figure 6）。

大学生が「自分の暮らし向き悪い」と捉え
ているほど、経済的困り感が高いことが示唆
されているとともに、レジリエンスの乏しさ
も経済的困り感につながっていることが示さ
れた。また、「自分の暮らし向きとレジリエ
ンス」および「自分の暮らし向きと話し相手」
に交互作用が認められている。つまり、自分
の暮らし向きとレジリエンスの交互作用効果
のある学生ほど、経済的困り感が少ないとい
える。また、自分の暮らし向きと話し相手と
よく話すということに交互作用効果のある学
生は、経済的困り感が大きいといえる。前者
については、レジリエンスが高いほど、暮ら

Table 3 将来展望に関わる因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

因子間相関： $r = .257$	Factor1	Factor2
Factor1：労働に関する価値観（ $\alpha = .574$ ）		
生活に困っても働けば何とかかなと思っている	.647	-.105
失業したり、困ったりするのは、本人が悪い	.583	-.220
自分はワーキングプア（貧困状態で働く）にならないと思う	.489	.155
将来の年金はともあてにしている	.378	.101
Factor2：家庭に関する価値観（ $\alpha = .612$ ）		
自分ひとりの生活で精一杯で結婚する余裕はないと思う	.039	-.740
結婚することに希望を持っている	.298	.560
子どもを生み育てることは難しいと思う	.174	-.517

しと経済的困り感の関連は弱くなることから、レジリエンスが重要であることがわかる。後者については、話し相手が多いほど、暮らしと経済的困り感の関連は強くなることが示唆されている。つまり、暮らし向きが悪くて、いろいろな人に経済的な困り感を相談していることが考えられる。

まとめと今後の課題

まず、経済的困り感を抱えた大学生たちが勉学に努力していることが、有意傾向ではあるものの、「経済的に困っている学生ほど、大学の授業以外の自主的な勉強をする時間が

長い傾向がある ($r = .116, p < .10$)」「経済的に困っている学生ほど、授業の予習や復習、課題などをする時間が長い傾向がある ($r = .101, p < .10$)」と示された。経済的に厳しさを感じている学生は勉学に対して切迫感を持って臨んでいる現状があると推測する。

また、本研究でも、自分の暮らし向きの悪さや経済的に困っているからこそ、貸与型奨学金を受給している現状が示された。多く借りている学生ほど、奨学金返済の不安が高まっていることから、まずもって給付型奨学金制度を拡充していく必要性があろう。

そして、吉中（2016）の将来展望を因子分

Table 4 経済的困窮度を従属変数とした重回帰分析

変数名	偏回帰係数	95%下限	95%上限	VIF
自分の暮らしぶり	-.605**	-0.699	-0.510	1.036
自尊感情	-.074	-0.186	0.038	1.447
レジリエンス	-.113*	-0.222	-0.004	1.382
話し相手の数	.031	-0.065	0.127	1.058
自分の暮らしぶり*自尊感情	.052	-0.057	0.160	1.349
自分の暮らしぶり*レジリエンス	-.117*	-0.225	-0.009	1.342
自分の暮らしぶり*話し相手	.098*	0.000	0.196	1.110
R^2	.429**			

従属変数：経済的困窮度

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

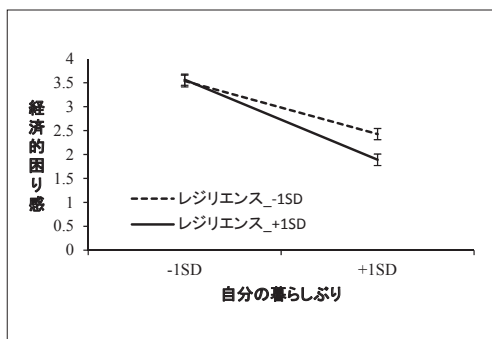


Figure 5 自分の暮らしぶりレジリエンスの交互作用結果

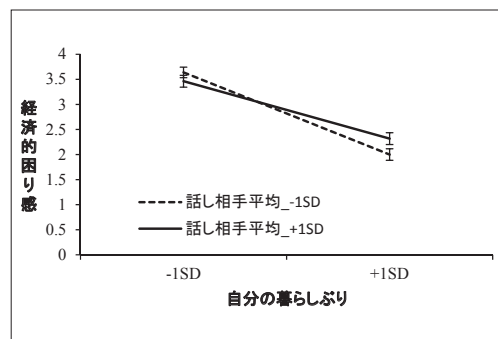


Figure 6 自分の暮らしぶり話し相手の数の交互作用結果

析してみた結果、「労働に関する価値観」と「家庭に関する価値観」の2因子が抽出されたことについて、大学生は、働くことや家庭を持つこと（結婚や子育て）といったことを将来展望として考えていることから、安心して働ける環境を整備していくことや、希望する人間に対して家庭を築けるような社会体制を構築していく必要があるだろう。

最後に、重回帰分析からは、「レジリエンス」が経済的困り感に与える影響も少ないことが読み取れた。

山野（2019）は、経済が人間に及ぼす影響について次のように述べている。貧困を生み出すモンスターがいるのではない。貧困を生み出してその影響を深刻化させる社会構造こそが問題なのであり、貧困状況にある人や女性、シングルマザー、子どもなど社会的弱者に対する、社会福祉制度を含めた応答性の低さが問われているのである。また、貧困と共時的に生じやすい社会的不利によって、長期にわたって（場合によっては世代をまたがって）影響は累積してしまいがちである。（中略）そうした時代には、経済に関すること、つまりお金がより子どもの育ちや社会的な弱者の生きづらさにつながりやすくなる（山野，2019）。山野が指摘する「社会的弱者」には、経済的困っている大学生も当然含まれ、従来の臨床心理学的アプローチが得意としてきた個別へのアプローチにとどまらず、生きづらさを緩和できる環境調整の視点が重要であると、再度指摘しておきたい。

今後の課題としては、経済的困り感のある学生のおかれた現状をさらに明らかにしていくことである。しかし、本研究でも「経済的に困っている学生ほど、大学の授業以外の自

主的な勉強をする時間が長い傾向がある」「経済的に困っている学生ほど、授業の予習や復習、課題などをする時間が長い傾向がある」と示唆されたように、その現状については、ネガティブな事象ばかりではなく、ポジティブな事象も捉えていき、学ぶ意欲のある学生の特徴についても焦点を当てていきたい。

文 献

飯田昭人：大学生生活と経済状況との関連についての研究（第1報）－仕送り、アルバイト、奨学金と自尊感情、レジリエンスに着目して、北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要第10号，161-172，2019。

飯田昭人・水野君平・入江智也・西村貴之・川崎直樹・斉藤美香：新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす影響（第1報）～北海道内の大学への調査結果から～，北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要第12号，147-158，2021。

飯田昭人・加藤弘通・吉住隆弘：[講演録] 2020年度北翔大学北方圏学術情報センター主催連続市民講座『心理学の視点から生活を支えることを考える』，北方圏学術情報センター年報第13号，113-124，2021。

都築 学：大学生の進路選択と時間的展望－縦断的調査にもとづく検討，ナカニシヤ出版，2007。

山野良一：貧困－家族依存社会の中で生きること，臨床心理学第19巻第1号，2019。

吉中季子：奨学金制度の利用からみる大学生生活の実態と課題－地方大学における学生アンケートからの考察－，名寄市立大学紀要10，47-58，2016。